ようこそ！夢の本棚へ

発行所：松居直コレクションプロジェクト
代　表：金戸 美紀子
事務局：石川県小松市
小馬出町10-3
空とこども絵本館
☎ 0761-23-0033
bookrin@city.komatsu.lg.jp

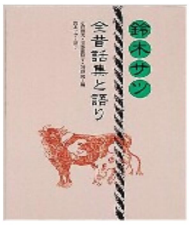
【活動方針】①絵本の楽しさを伝える〈親子読書の奨励〉②絵本の歴史を学び、進むべき方向を考える〈絵本文化の研究〉③市が所有する知的財産として、次世代に正しく伝える〈絵本文化の継承〉

声の文化と絵本 ⑨

～家庭に本があって繰り返し読む環境を作る～

二百話語りの名人

◆私は、日本で〝二百話語り〟という鈴木サツさん（1911～96）という岩手県の遠野にいらっしゃるおばあさんとお付き合いをしておりました。サツさんの二百話を本にして出版（188話収録）したことがありますけど、サツさんに保育者の集まりなんかに来ていただいて話をしていただくと、本当に自然に気取りなく昔話をされるんですね◆遠野弁でやられますけど、ある時「お聞きになりたいお話はありますか」とおっしゃったんですね。そしたら「『かさじぞう』をしてください」って方が一人いらして、おばあちゃんは普段ならすっと語り出されるのに考えてらした。ちょっと不安もありましたけど、やがて語り出されましたら、見事によどみなく最後まで語られた。



小沢俊夫・遠藤篤・荒木田隆子編集
鈴木サツ
1999年/福音館書店刊

自分の中で絵が見える

◆翌朝、私はご飯の時に「おばあちゃんの『かさじぞう』も、お父さんからお聞きになった話ですか」と聞いたら、「はい。父から聞いた話はいっぱいあります」と。そして「私は5歳の時から小学校の5年生まで、毎晩のように父が話をしてくれました。それで私は、昔話に興味を持った。父は、本当に目に見えるような語り方、話し方だった。それが、いつの間にか私の中に入って来て、私も全部、目に見えるようになりました」◆「私は昔話の文章を読んだことはありません。父の話をしてくれたのを聞いてると、父の中に絵が見えてるってのが分かって、それが自分の中で見えるようになりました。皆さんにお話ししてる時には、自分の中で見えてるものを言葉でお伝えしてるだけでございます」一頭で記憶してるんではないって言うんです◆見えてるから見えてる通りに話をする。私は〝昔話〟の本質ってもの、〝語り〟っていうのがどういうことか、その時にしみじみと感じましたね。文字にするってのは現代になってからのことで、サツさんとか語り部をされる方は、本当に少ないです。

親子が共有する時間を持つ

◆昔話っていうのは、言葉を覚えていて語るんじゃなくて、その物語の世界がちゃんとありありと見えるから、実感が湧いてきますから、それを言葉にしてる。だから時々、サツさんの同じ話を聞いてると、前のとちょっと違うってこともありました◆こういう言葉の力ってのを、私たちはだんだん失っておりますので、皆さんが絵本を読んでおやりになる時も、ただテキストを読むんじゃなくて、まず自分が物語を読んで、自分の中にその物語の世界を想い描いて共感ができれば、その気持ちで子どもに絵本を読んでおあげになりますと、子どもの方もちゃんと分かると思います。「ああ、お母さん。ちゃんと自分の中に見えてるんだなあ」ってことが分かる◆リアリティが、真実さが伝わってきますから、子どもは単に絵本を上手に読んでもらってということではなくて、真実が伝わるような語りかけをしてもらうと、言葉が生き生きと子どもの中に生きてきます。そして、生活の中に、親と子どもが共に生きる力、喜びを共有する時間を持つっていうこと、これこそが家族ですから。

家庭に本がある環境

◆私が月刊絵本を作ってるのは「家庭に本がないとだめだ」というふうに思っているからです。家庭に本があると、繰り返し繰り返し読む◆子どもが喜ばなくてもいいです。1年ほど経つと、去年喜ばなかった本が、すごく喜んだりすることがいっぱいあります。その時、その時で子どもの気持ちは変わりますから、いろんな本があっていいんじゃないのかなというふうに思っております。

（つづく）